ほんない歴史通信
第８９号
2018.12.1

「袋田の滝」、その昭和史の一端を探る

―昭和二年、投票による観光地選びの断片―

平成三十年十月二十五日、東京・銀座にアンテナショップ「イバラキセンス」がリニューアルオープンした。茨城県のブランド力向上を目的とした情報発信の拠点と位置づけられている。そのダイニングでは、食事をしながら壁に映る袋田の滝の映像が楽しめるという。袋田の滝が、誰もが認める茨城県の象徴的な景勝地になっていることのまさに証しであろう。

さて、西行法師をはじめ古くから多くの文人墨客が袋田の滝を訪れ、その絶景に感嘆して様々な作品を残していることは間違いない。しかし他方で、多くの県民に、あるいは国民に知られていたかというとそうとも言えない。昭和の初めまで、その知名度はむしろ低かったのではないかと思われる。それを打開し、知名度を押し上げるきっかけとなったのが、全国民に参加を呼び掛けた投票による観光地選びであった。

昭和二年四月九日、東京日日新聞（後の毎日新聞）に一つの社告が載った。曰く、「昭和の新時代を代表すべき新日本の勝景は宜しくわれ等の新しい好尚によつて選定されなくてはなりませぬ。これ本社がこの昭和の時代の初頭において『日本新八景』の選定を江湖にはかるゆゑんであります」。新八景の選定方法は、山岳、渓谷、湖沼、海岸、河川、平原、瀑布、温泉の八部門ごとに一般国民からの推薦投票によって「高点順十位づゝを候補地として」選び、各方面の学者専門家を主体として組織される審査委員会で決定するというもの。主催は東京日日新聞社と大阪毎日新聞社であった。連日、関連記事が紙面をにぎわせるなか、投票は翌四月十日から五月二十日までの四〇日間にわたって行われた。同時に、四月十六日付紙面からは部門別の開票速報が掲載された。

この呼びかけに、茨城県や大子町域の人たちはどう反応したのか。東京日日新聞茨城版は、興味深い記事を毎日のように載せている。当初、県首脳部は「山では筑波、湖沼では霞ヶ浦、海岸では大洗」を有力候補地として考えていたが、開票速報が瀑布部門の上位に「袋田瀧」があることを伝えると、「筑波と袋田を投票せよ」とその認識を大きく変えた。何より、地元袋田村及び袋田保勝会を軸とした投票運動には一段と拍車がかかり、運動の輪も他の市町村へと広がっていった。一例を挙げよう。五月十九日付の茨城版は大子青年会の動きを伝えている。「十八日雨の中を会員数名が水戸市に来り自動車で市中をねりまはし水戸市民の御投票を乞ふと謄写版ずりの宣伝ビラをまいたが水戸署へも持ち込んで来るので署員もそれぞれ袋田の瀧のため投票した」、と。県内外に広がった運動が功を奏し、何と「袋田瀧」は四十六万八三八票を獲得して瀑布部門第一位に輝いたのである。しかし、「袋田瀧」は八景には選ばれなかった。審査委員会が選んだのは華厳瀧であり、「袋田瀧」は日本廿五勝の一つに位置づけられることになった。

ただ、何人も予想しなかったこの結果と投票を通じて全国的に紹介されたことの意味は大きい。水郡線の開通（昭和二年三月）とも相まって滝を訪れる観光客が大幅に増えただけでなく、袋田駅と滝を結ぶ道路の改修や休息所の設置等今日につながる環境整備の起点ともなった。そして何より、絶景を愛でるため誰もが一度は行ってみたいと思う観光資源に成長する第一歩ともなった。

それにしても、投票運動に駆り立てた熱情はどこから生まれたのであろうか。その深層に思いを馳せざるを得ない。

（齋藤典生）

江戸の詩人大窪詩仏（五）

島崎和夫

酒と書

詩仏は酒が好きでした。「竹」と題する『詩聖堂詩集二編』巻六に収められた五言絶句があります。五四歳のころの作です。

君亦雖沈酔　君もまた沈酔すといえども、
一年纔一回　一年わずかに一回、
不似老詩客　似ず、老詩客の
日傾三百杯　日に三百杯を傾くるに

（読み下し　大森林造『大窪詩仏ノート』）

竹に竹酔日（五月十三日。この日に竹を植えるとよく繁茂するという）があるが、年一回に過ぎない。この老詩人は日々三百杯を傾けて楽しんでいる、と詩仏は言うのです。

江戸の高級料亭八百善の二階座敷で、亀田鵬斎、谷文晁、大田南畝と酒を飲み交わしている画があります（『江戸料理通』）。気心のしれた友人に囲まれて談笑する詩仏の表情は、その人柄をよくあらわしています。

酔えば、詩を詠み、筆を揮います。ときには竹の絵を添えて。墨竹は、書の筆の動きから生まれるものです。書の巧みな詩仏だから描けるものでした。酔えばなおさらです。

『詩聖堂詩集初編』の市河寛斎序文に「文雅の家には必ず詩仏の詩と竹を書いた軸物がかかっている」とあるほど、詩仏の詩と書および詩に添えられる竹の画はもてはやされました。旅先でも求められれば、気軽に応じていたのです。

文人が詩文書画の作品について、応分の対価を取ることを恥としなくなったのは、文化年間から始まるといわれます。つまり文人を本業として生計が成り立つようになり、詩仏もその一人、いや詩人では詩仏だけだったと言ってよいでしょう。

詩仏の死

天保七年（一八三六）夏、長女百二が医者の小川泰堂と結婚します。その直後詩仏は吐血し、一旦回復したものの翌天保八年二月病状が悪化し、十一日に歿します。享年七一でした。

豊後国日田郡堀田村（現大分県日田市）の学塾咸宜園において三千人をこえる門弟を養成した広瀬淡窓が、日記「懐旧楼筆記」（『淡窓全集』）の天保八年三月二十七日の条に次のように記しました。

大窪詩仏没スルコトヲ聞ケリ。余其名ヲ聞クコト、已ニ三十年。齢ハ七十余ナルベシ。五山、詩仏ノ名、児童ト雖モ知ラザルモノナシ。故ニ交義ナシト雖モ、其死ヲ録ス。

戒名は天真詩佛居士。浅草の光感寺に葬られます。墓碑には、「詩仏大窪先生墓」と隷書体の大字で刻まれています。詩仏に詩書を学んでいた小倉藩世子小笠原忠徴の書です。

のち墓は藤沢市に移されますが、現在は池上本門寺（東京都大田区）の大堂の傍らにあります。

【付記】　日立市郷土博物館で、二〇〇八年三月に「江戸民間書画美術館渥美コレクション　大窪詩佛展」が開催されました。東京世田谷の渥美國泰さんのコレクションから、詩仏作品百四点と谷文晁ら友人の作品数十点が展示されました。その展覧会の担当は、当時博物館につとめていた私でした。詩仏の名前は知っていたという程度で、詩のことも書のこともまったくわからない状態で始まりましたが、渥美さん、そして詩仏研究家の大森林造さんお二人のご尽力により開催することができました。本稿も、そのお二人の仕事にすべてを負っています。感謝申し上げます。

（日立市在住）

従是奥は真っ暗やみぞ

―「八溝」の名称を史料から探る―

飯村尋道

八溝山（一、〇二二米）は茨城・福島・栃木三県に跨る本県最高峰の霊峰である。山上近く八合目の「八溝山日輪寺」は『ほとけの光り山も輝く』と詠われた坂東の霊場であり、その守護神として山上に鎮座する「八溝嶺神社」は山麓の村々に豊穣をもたらす嵐除けの作神として、古来より崇敬され今日に至っている。

さて「八溝」の名称は、平安時代の『続日本後紀』承和三年（八三六）正月の条に「八溝黄金神」が、延長五年（九二七）に編纂された『延喜式』に「八溝黄金神社」が出てくることから、遠く奈良時代頃には既に使われていたのではないかと思う。

その八溝の名の由来は次のようである。「高笹山の半腹に畏るべき鬼神がいて、或時は鬼形に或時は蛇身に又は婦人童子と化けて人を害した。土人はこれを鬼賊大猛丸といった。昔は山を囲んで人家も多く、高笹山に朝日が斜陽に照る時は嶺に五色の雲が起きて雲中に音楽の響きがあった。ところがこの鬼神が住んでから人家も離散してついに怖畏の地となった」という。偶々「弘法大師は湯殿山からの帰路ここに到り、この話を土人から聞いて、鬼賊の怖畏を除んと高笹山に登ると、鬼賊の仕業か雲霧山を覆し頻りに風雨震動し東西も分からない。そこで大師が虚空に向かって般若の字を書くと忽ち雲は晴れ風定まって鬼賊は退没した」という。そして「大師が絶頂に至り山の形を見ると八葉の覆蓮花の如く峯より八個の谷分れ山水八方へ流れ落ちている。よって八溝の嶺と呼んだ」という（『八溝山日輪寺旧記』、原文の意訳。傍線は筆者、以下同様）。この八峰八谷が一般的に由来の通説となっている。

水戸義公（光圀）は、八溝山に登り「八谷」の異名を命名した。即ち『八溝山日輪寺縁起』にある清浄谷（真名板沢）、蓮華谷（極楽沢）、菩提谷（妙院沢）、鬼里ヶ谷（殕石沢）、肉流谷（腐れ沢）、獅子谷（鹿野又沢）、濃鮮谷（崖ヶ畑）、沈永谷（金山沢）の八谷である。

写真は戦前、下妻町の田畦豊氏が日輪寺籠堂の茶ノ間にあった「悪路王大竹丸首指物」の掛軸を模写したもの。

大猛丸は『近津大明神縁起』（元禄十三年）に「凡三ヶ国の界に大山あり元来草木生茂り常に雲霧立おひ月日の影も漏さざれば昼猶夜の如し（中略）山上に悪鬼あり、烈風を起し暴雨を降らせ年穀を傷なひ牛馬を挫き鶏犬を取掠て禍頗る人民に及ぶ」と。

また『常陸紀行』（文政九年）に「八溝山に妖鬼ありて常に陰雲晦冥、麓も雲霧濛々として黒暗なりし故に黒沢と呼ぶとなり、土人因て此黒沢より奥はやみぞと云ふ」、昼なお夜の如く真っ暗やみにしているのが鬼賊大猛丸で「此妖鬼を近津神が退治し、今近津宮に神宝となりて爪牙なと存せり、又一説には龍蛇蟄蔵して人民を残害せり、須藤権守某、八溝山の奥笹ヶ岳（高笹山）にて平治せしよし那須記に見ゆ、今上野宮村に洞穴ありて蛇穴と呼坪名あり是毒蛇蟄せる處なりともいへり」と。

『東白川郡誌』にも「陰暗幽冥、妖鬼住み人跡全く絶つ、俗に称してやみぞと云ふ」と。

大猛丸は『八溝山日輪寺旧記』では弘法大師、『那須記』（延宝四年）では須藤権守、『近津大明神縁起』や『白河古事考』（文化元年）では池田村領主藤原冨得が退治したとなっている。

八溝の由来が「八ッの溝」か「真っ暗闇ぞ」なのか、奥深い八溝はまだまだ探訪尽くせず、まさに「やみぞ」である。

（常陸大宮市在住）

大子町・鎮守の杜（九）

熊野神社（大子町浅川三九〇三）

高根信和

大子駅前から市街地を通り、県立大子清流高等学校を過ぎて県道一六〇号（梨野沢大子線）を走る。道路の脇には浅川の清流が流れ、左右には赤く色づいたリンゴ畑が続いている。駅から約五キロメートル、茨城交通バス停「中井」から約二〇メートルのところに熊野神社の社号標、旗立柱、文化財の説明板が設置されている。参道を上り鳥居をくぐると、随身門から境内に入る。巨大なスギの杜、歴史の重さを感じる。正面に社務所（直会所）、左手に折れると拝殿である。

境内右手に昭和三十七年十一月建立の「浅川のささら」、「浅川獅子頭」が文化財に指定された記念碑、狛犬、石燈籠、神庫、御神木の巨スギがある。また、一三段の石段を上ると玉垣に囲まれた拝殿、右手に天保七年（一八三六）奉納の石燈篭が一基ある。

拝殿は入母屋造り、銅版葺き、間口三間、奥行二間の広さ六坪である。拝殿の扉の両側には花鳥、向拝の天井にはみごとな龍の彫刻が見られ、また屋根の鬼板の部分には鬼面が取り付けられている。本殿は銅版葺き、広さは一間四方の一坪で、拝殿と屋根が連結されていて内部は見えない。本殿の左手には三基の末社、右手には大龍神社他一基の末社が鎮座している。『茨城県神社誌』には末社として、大六天王神社、八龍神社、白山神社、淡島神社、愛宕神社、鹿島神社、見渡神社、別雷皇大神、稲荷神社が記載されている。

社伝によると、天応元年（七八一）に紀州熊野権現を勧請、天正元年（一五七三）十二月二十八日社殿を造営、熊野山大権現と尊称、別当大光院が奉務していた。安永三年（一七七四）失火、文化三年（一八〇六）本殿造営し、天保九年（一八三八）に拝殿を造営した。祭神は伊邪那岐命（いざなぎのみこと）、神紋は三ツ巴紋である。

社宝として獅子頭（太郎・次郎・女獅子）三頭がある。面の長さは一九センチから二三センチ、材質は桐材で、目・鼻・歯には金箔がほどこされ、その他には漆が塗られている。太郎・次郎獅子には二本の角、女獅子には一本の角がある。いずれも朱色である。頭部は、東天紅の羽根で覆われている。寛永七年（一六三〇）吉成八衛門作の銘があり、徳川光圀からの拝領物と伝えられている（昭和三十七年二月、茨城県有形文化財・彫刻に指定）。

「浅川のささら」は、熊野神社の祭礼に奉納される獅子舞である。二〇年ごとに、神輿が神社から祭事場まで渡御する間、行列の露払いとして参加する。祭事場に神輿が安置されると、その前で舞が奉納される。舞子方三人、囃子方四人で構成され、平和を願い、五穀豊穣を祈る舞である（昭和三十年六月、茨城県無形民俗文化財に指定）。

（水戸市在住）

熊野神社拝殿を臨む

鳥居の向こうに随身門が見える

菊池雄二郎氏所蔵文書について

野内正美

平成三十年二月十六日に大子町上岡の菊池雄二郎氏から大子町教育委員会へ、「書物等資料六五点と書掛軸一点」の史料を調査して欲しいとの相談があった。

「書掛軸」については、松戸市戸定歴史館の小寺瑛広研究員より、最後の水戸藩主徳川昭武の花押であるとのご教示を得た。

「書物等資料」については、昭和四十九年に茨城県立歴史館が開館したあと、桜庭宏歴史館研究員が「茨城県政資料展」を開催したときに整理したもので、内容は、初代・二代の菊池武保が県議会議員であった時代に関するものである。大正期には憲政会（大津淳一郎）と政友会（根本正）が水郡線建設（昭和二年三月十日常陸大子駅開通）をめぐって争っており、当時の政治の動きを知る上で、貴重な史料である。その史料の一端を紹介しよう。

・大正九年五月二十四日　史料番号②（手紙）
　大子煙草生産組合同業組合長木沢源太郎から「大正八年煙草耕作成績優勝旗授与式挙行について」
・大正十一年九月一日　史料番号⑲（手紙）
　大津淳一郎から「菊池武保妻逝去の弔辞」
・大正十二年九月十日　史料番号⑨（手紙）
　川口利吉から「県会議員選挙への立候補の挨拶」
・大正十二年九月十三日　史料番号⑩（手紙）
　永瀬清から「県会議員選挙への立候補の挨拶」
・大正十三年一月二十六日　史料番号①（手紙）
　大津淳一郎から「清浦内閣不信任案提出につき」
・大正十三年一月二十八日　史料番号⑫（手紙）
　衆議院議員石井三郎から「清浦内閣不信任案の現況報告」
・大正十三年三月　史料番号⑦（手紙）
　大津淳一郎から「来る総選挙への立候補の挨拶」
・大正十三年四月一日　史料番号⑪（手紙）
　憲政会保内有志から「衆議院議員総選挙に立候補した大津淳一郎への推薦依頼」
・大正十三年六月十日　史料番号③（手紙）
　憲政会茨城支部から「憲政会茨城支部幹事会開催通知」
・大正十三年六月十日　史料番号④（手紙）
　憲政会茨城支部から「保内郷の評議員の加筆依頼」
・昭和二年九月　史料番号㉘（手紙）
　永瀬清ほか四九名の「菊池武保君の県会議員候補者推薦状」
・昭和二年十月一日　史料番号㉜（通知書）
　茨城県知事から「県会議員当選証書」
・昭和八年十月十五日　史料番号⑱（手紙）
　蚕業取締所水戸支所の武藤常介から「蚕業取締所水戸支所太田出張所支所昇格期成同盟会結成、顧問就任依頼」
・昭和八年十月　史料番号⑤（手紙）
　衆議院議員中井川浩から「久慈川改修について」
・昭和八年十月二十二日　史料番号⑰（手紙）
　久慈川改修期成同盟会長武藤常介から「久慈川改修の件、調査決定の礼状」
・昭和八年十二月十三日　史料番号㉗（葉書）
　菊池武保から「県会副議長当選御礼挨拶状」
・昭和二十一年九月十一日　史料番号⑧（手紙）
　茨城県内務部長から「臨時県会招集通知」

菊池雄二郎家は、初代武保、二代目武保ともに大子町長を務めている関係から、大子町の政治、経済の動きを知る上で貴重な史料を所蔵している。さらなる調査が必要と思われる。

（常陸大宮市在住）

大子のお医者さん（二）

大金祐介

近代の大子は、医師が数多く集まる町であった。はたして、どのような医師が集まり、どのような活躍を見せていたのであろうか。「大子のお医者さん」シリーズでは、毎回、近代の大子において活躍した医師をご紹介したい。

樋口寛三　大子町泉町、小崎陶器店の向かいに、国の登録有形文化財に登録されている病院建築がある。かつて樋口医院として使われていた建物である。この樋口医院を開業したのが樋口寛三である。

樋口は、明治二十年（一八八七）九月九日、大子町泉町の樋口本店の店主樋口與平の三男として生まれた。樋口本店は、現在の旧セラヴィのところにあった。金物、肥料、荒物などを販売し、貨物運送業や旅客運輸業まで手掛けていた。また、大子町泉町、現在の大子町特産品流通公社・大子町地域おこし協力隊事務所のところには、樋口本店の呉服部門を母体として開店した樋口本店の系列店とも言うべき樋口呉服店があった。樋口本店は、近代の大子を代表する大店のひとつだったのである。

樋口寛三

大子でも屈指の豪商の家に生まれた樋口だったが、彼は商売の道には進まなかった。明治三十九年に東京開成中学校（現・私立開成高等学校）を卒業すると、同じ年に千葉医学専門学校（現・千葉大学医学部）に入学し、医の道に進んだのである。明治四十三年に千葉医学専門学校を卒業すると、一年志願兵として宇都宮の歩兵連隊に入営した。除隊後は、千葉医学専門学校附属医院（現・千葉大学医学部附属病院）などの病院に勤務し、研鑽を積んだ。大正三年（一九一四）には、陸軍三等軍医に任官し、正八位に叙された。

樋口医院の広告（昭和３年）
『保内郷各町村商工庶業家総覧』より

大正四年、故郷に戻った樋口は、樋口医院を開業した。樋口医院では、内外科一般の診察をしていたようである。樋口医院開業後の樋口については、「千葉医専の名医にして大正四年開業、最新式の技術家にして克く諸般の研究をなせり」（『イハラキ時事』第六巻第九号、大正十年発行）、「医術に秀て家運益々繁盛す、資性剛直町内の有力者として重んぜらる」（弘文社編『茨城人名辞書』昭和五年発行）、「剛直、経行、杏林の一異材」（いはらき新聞社編『茨城人名録』昭和十四年発行）といった評伝が残されている。樋口は、最新の優れた医療技術を駆使し、人々の好評を博していたようである。

本誌第八八号において、石井栄次郎が医師としてだけでなく政治家としても活躍したことをご紹介した。実は、樋口も「町内の有力者として重んぜらる」との評伝に違わず、医師として働く傍ら町会議員を務め、政治家としても活躍した。

樋口医院は、樋口寛三とその後を継いだ小林郷次郎（樋口の娘婿）の二代の医師により、大正四年の開業から平成十四年の閉院まで、実に八七年の長きにわたって地域の医療を担った。

（大子町在住）

大子町在住小生瀬宝泉寺の扉に見る大子の中世（一）

藤井達也

大子町小生瀬に真言宗の宝泉寺がありました。永正元年（一五〇四）の創建と伝わり、上利員村（常陸太田市）鏡徳寺の末寺となっていました。しかし、宝泉寺は水戸藩主徳川斉昭の寺院整理によって、天保十五年（一八四四）に廃寺となってしまいます。

水戸市加倉井にある日蓮宗の妙徳寺に、小生瀬宝泉寺の本尊を安置した厨子の扉が保存されています。扉を収めている箱にその由来が記されています。天保十五年に廃寺となった小生瀬宝泉寺の厨子の扉には、戦国時代の年号「永正」「大永」や「加倉井」という名字の墨書が記されていました。そこで、加倉井氏の子孫である加倉井淡路（砂山）のもとに扉が送られ、加倉井氏とゆかりのある妙徳寺に伝わることとなりました。こうした偶然を経て現存する扉には、大子周辺の中世を考える上で非常に貴重な情報が記されています。数回に分けて紹介していきます。

小生瀬宝泉寺（国立国会図書館蔵「常陸国北郡里程間数之記」）

宝泉寺の扉の右側には大永六年（一五二六）の書付、左側には永正七年（一五一〇）の書付が見られます。そこには、花押を添えた署名や和歌も見られます。永正七年の書付から順に内容を見ていきたいと思います。

【永正七年部分】

〔原文〕

両那須さい乱について江戸動を成候、然間当地陣取候者、
野口周防守六十三　野口すわう（周防）義国（花押）

春秋下野守
内藤修理亮
矢田部大蔵忠　　永正七年八月廿一日
江戸いつ（伊豆）
かくらい（加倉井）日向守

〔現代語訳〕

両那須（上那須氏・下那須氏）が再び対立を始めたため、江戸氏が軍事行動を行っています。その時、当地（小生瀬宝泉寺）に陣をとった者は以下の通りです（人名は省略）。

永正七年、対立を繰り返していた上那須氏と下那須氏の関係が再び燻り出します。この時に、上那須氏を支援する古河公方足利政氏から佐竹氏に那須出兵が命じられました。佐竹氏は永正七年八月頃に、那須方面への通り道である依上保に軍事行動を行います。これは佐竹氏の依上保進出として知られています。この時に、六三歳の野口周防守義国とともに江戸氏（江戸伊豆）及び江戸氏家臣（春秋氏、内藤氏、矢田部氏、加倉井氏）が小生瀬宝泉寺に陣取ったのです。野口氏や江戸氏は佐竹氏に従って軍事行動を行っていたのでしょう。（続く）

（水戸市在住）

【訂正】　拙稿「【史料紹介】「道中行程記」―棚倉から八溝山への道」（本誌第八八号所収）で、「弘法大師護摩之所」が「山本不動尊」を指すと記しましたが、「奥ノ院の護摩壇」（鬼煩山）の誤りでした（飯村尋道氏のご教示）。ここに誤りを訂正いたします。

大子町の経済更生運動と
農村改良劇「栄ゆく村」（二）

昭和初期の大子町は、二年（一九二七）三月の大郡線（のち水郡線に改称）常陸大子駅の開通や大子郵便局の電話の開設など、重要なインフラ整備が進展した時代であった。因みに、五年一月の大子駅の乗車人員は五六四〇人、降車人員は五五〇六人となっている（昭和五年二月八日付「いはらき」新聞）。九年三月には水郡線が全線開通し、鉄道省運営の常野線省営バスが大子駅と烏山駅間で運行を開始する。水戸、東京方面のみならず、福島、栃木方面との交通も容易になった。また、水郡線沿線の各駅には運送店が開業し、農産物や林産物の貨物輸送が行われると、販路が拡大し、大子地方の経済発展が大いに期待されることになった。

しかしそうした一方で、農村の生活は窮乏に喘いでいた。

昭和四年（一九二九）十月二十四日、ニューヨーク株式市場で株価が大暴落した。その後も暴落を続け、わずか二、三週間で、アメリカが第一次世界大戦に消費した金額に相当する三百億ドルが吹き飛んだとされる。原因は、自動車、電機、住宅建設などの産業が頭打ちになっていたこと、富裕階級と貧困階級の格差の拡大、異常な株式投機などと言われている。このアメリカの大恐慌は、世界規模の恐慌に拡大し、翌五年には日本の農村を直撃した。いわゆる昭和恐慌である。

当時、アメリカ向けに輸出していた生糸の価格が暴落し、それを導火線として他の農産物価格も次々と下落した。もっとも打撃の大きい繭は、六〇パーセント以上値下がりしたと言われる。生糸は日本の輸出品総額の約四割を占め、その九割以上はアメリカへ輸出されていたのである。農産物の価格は、繭をはじめとして米、麦、蔬菜、花卉、果実、茶、その他ほとんどのものが下落し、その期間は昭和五年から十年にかけて六年にも及んだ。十一年にはほぼ回復しているが、ただ繭の価格だけはわずかに上向いている程度であった（『本邦農業要覧』一九四〇年版参照）。

こうした農産物価格の下落は、農家経済の窮迫と負債の増幅を招き、農業経営が疲弊する。更に農民の生活を苦しめたのが、降雹、豪雨、冷害などの自然災害である。例えば次の通りである。

降雹と豪雨で　保内郷地方の惨状

黒沢、宮川地方の被害が殊に甚大　麦、煙草は全滅の姿

さる五日来の大降雹で県内でも最も惨状を極めた保内郷地方は驚くべき大被害を蒙り殆ど目もあてられぬ悲惨な個所もあり〈中略〉最も被害多いのは大子町浅川冥賀部落で浅川の調査によると葉煙草被害は約三割十三町歩、大小麦ビール麦三十町歩その他蔬菜果樹類も非常な損害を蒙つてゐる更に八溝嵐の豪雨と大降雹に一たまりもなく打ちのめされた黒沢村から宮川村にかけては煙草、大小麦等の農作物は殆ど全滅の惨状で麦類煙草作等は再生の見込み立たず約七割余に達する被害に一般農作者は血の出るやうな思ひでその跡へは他の農作物を耕作する等の惨状を呈してゐる　（昭和六年六月八日付「いはらき」新聞）

（井上和司）

編　集　大子町歴史資料調査研究会
編集人　齋藤　典生（大子町歴史資料調査研究員）
　　井上　和司（大子町歴史資料調査研究員）
　　家田　　望（大子町教育委員会）
発　行　大子町教育委員会
　　久慈郡大子町大字池田二六六九番地
大子町立中央公民館☎０２９５（７２）１１４８